

「就労すること」

就職指導部 今城 慎一郎

先日の合同保護者研修会で、高等専修学校を卒業した自閉児の様子を初めて見られた方も数多くいらしたと思います。

彼らはそれぞれの職場で、「君、ちゃん」といった聞き慣れた呼ばれ方から、「さん」という呼びかけに相応しい職業人となるよう、本人と保護者が一体となり日々努力しています。

「さん」と呼ばれるということは、確固たる人格を認められたということになります。

自分自身のことに置き換えてみましても、周囲からの大きな期待にこたえ、求められる膨大な職務処理能力を身につけるにはかなりの時間が掛かったはずで、諸条件（難易度）は異なるとしましても、能力に対する職務処理量は、我々のそれよりも確実に高いと思われます。ですから、少しでも分かりやすく現状の課題を提示し、理解させるよう心掛けなくてはなりません。実際、職場には大抵数名の担当者が存在し、その方々が最善と思われる方法でコミュニケーションを図っています。しかしながら、その方法が彼らにとって最善であるとは限りません。（担当者によっては、様々な方法を試みて、個性に順応した独自の方法を見付ける場合もあります。）担当者の接し方一つで、彼らの職場での立場が左右されることは何とも悲しいことですが、賃金を頂いて職務遂行する実社会では致し方の無いことなのかもしれません。ですから、企業就労と福祉的就労でどちらが本人にむいているのかを見極めなければなりません。

企業就労では、周囲の方が生活面の確認を大まかにしか意識しませんが、福祉的就労では事細かに確認し、気になることは確実に家庭へ連絡をとり相談があります。（実は、ここに大きな落とし穴があります。）

就労することとは「相談されないから大丈夫」という考えを捨てて、職場に頼りすぎないということなのです。企業就労だから、福祉的就労だからといった特権は一つもありません。

冒頭で記述しました通り、職場では一人の職業人として確固たる立場を与えられているのですから、その立場を定年まで維持していくためには、それ相応の努力が要求されます。常に、可愛がられて、有意義に職業生活を送るにはどうすれば良いかを周囲の者が気にかけて、本人に促すことが職場定着には欠かせません。当面の事だけではなく、先のことも考えて「さん」と呼ばれる実社会に羽ばたいていきましょう。